

「すみません」から、いきましょか？

公益財団法人京都 YMCA リトリートセンター 事務局長

遠藤 浩

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

(マルコによる福音書 1 章 14～15 節)

はじめに

こんにちは。京都 YMCA の遠藤と申します。

実は歴史的に同志社は、京都 YMCA との関わりを多く有していきまして、そうした同志社で京都 YMCA の一員であるわたしがお話しさせていただけるというのは、歴史を踏まえるとたいへん意義あることではないかと思っております。同時に、同志社で学んだ一個人としてもたいへん光栄なことであり、感謝しております。

自己紹介

わたし自身のことを少し申しますと、若いころ同志社大学文学部の学生として 1970～1980 年代を過ごし、神戸 YMCA で 20 数年働いたのち 2008 年社会人入試で神学研究科に入れていただき、原誠先生のご指導のもと、神学を学ぶ機会を与えられました。神学研究科で修士論文と博士論文を書くのに 8 年半を費やしましたが、京都 YMCA で非常勤の仕事とボランティアをしつつ同志社で学ぶという充実した日々でした。現在、同志社大学キリスト教文化センターの李元重先生とは、2008 年度神学研究科入学の同期ということになります。

白状すると、18 歳からの最初の同志社時代はふざけた学生でしたから、同志社の「ド」の字も、これっぽかりも考えてはいませんでした。皆さんはわたしなどよりずっと真面目な学生さんでしょうから、学生時代を通じ、ここ同志社で学んでいる意味を問う経験を何度も持たれるでしょう。それは今流行りの「今すぐ役に立つ学び」ではないが、決して皆さんの人生にとって、無駄なことにはならないと今だから言えます。ただ、皆さんの年代の頃のわたしは先ほども申しましたように、そんなふうには思えていませんでした。だから今、ここで同志社スピ

リットについてお話しするには分不相応だという思いは、ずっとございます。

しかし、同期の李元重先生から「遠藤さんがとても同志社スピリットのだから」という身に余るお言葉をいただき、少々図に乗っているとは思いつつもお話ししたいと思います。

金森通倫^{かなもりみちとも}をご存知ですか。熊本バンドの 1 人として新島が指導する同志社英学校へやってきて、卒業後は牧師になりますが、その後キリスト教を棄教したり、信仰を回復し再入信したら同志社系の教会には戻らず、救世軍からホーリネス教会と教派を梯子^{はしご}するようにして伝道を続け、晩年は洞窟^{いんとん}で隠遁生活。波乱万丈、極めてマイウェイな人生を歩んだ人で、変わってるといえば変わっている。この人、実は石破茂首相の曾祖父なんです、金森という人、ある意味でたいへん同志社らしいといいますが、はたから見ると一本道を歩いたようには見えないが、本人には一本道なのでしょうか。でも所謂^{いわゆる}「普通の人」からはどうもそうは見えない。自分の心の命ずるままに進んで、型にはまらない。同志社スピリットというとき、王道を行った人よりもそんな人がむしろ思い浮かびます。

金森のことを思い出したとき、自分は金森ほど歴史に残る偉い人でもないけれど、そういえばけっこう変な道を進んだなあと思っています。YMCA で勤め、同志社神学研究科で博士論文まで書きながら牧師にはならず、今はキャンプ場の堂守りみたいなことをやっている。こんな変ちくりんな奴でも、いや、むしろこんな変ちくりんだからこそ同志社スピリットというなかに呼び込んでいただけたのだろうか。そのような裏メッセージを李先生から逆にいただいたような気がしまして、励まされたといえますか。であるならば、同志社が同志社が…という型どおりの語りではなく、今の自分自身から、自分が置かれている場からメッセージを伝えることが大事ではないかと、そう受けとめ、この妙ちくりんなメッセージ・タイトルになったという次第です。

YMCA と同志社

さて半歩本題に入ります。皆さんは YMCA をご存知でしょうか？

YMCA は何の略かというと、

Young Men's Christian Association

ということです。

日本語ではキリスト教青年会です。明治・大正・昭和初期のキリスト教界隈では、単に「青年会」、というだけでそれは YMCA のことでした。今や世界で約 120 の国や地域にあり、世界最大級の NGO といってよいと思います。時間が限られるため世界の YMCA については、産業革命下の 1844 年創立のロンドン YMCA が世界最初の「YMCA」、ということにとどめます（以下「YMCA」を「Y」と表記）。

日本での Y (=キリスト教青年会) は歴史的に同志社との関係が濃厚です。同志社英学校誕生から 5 年後の 1880 年、東京 Y が日本最初の Y として創立され、以降大阪、横浜、神戸と続き、京都は 1889 年、日本で 5 番目の Y として創立されています。

それぞれ創立の中心人物には同志社出身の牧師たちや、同志社の有力な関係者がいました。英学校の 1 期生である本間重慶^{ほんましげよし}をはじめ、とりわけ熊本バンドの小崎弘道や宮川経輝^{つねてる}、原田助^{たすく}などです。とくに小崎は、東京で最初の Y に日本名を付けるとき「青年」という言葉を案出したと伝えられています。当時一般的だった同義の単語は「若衆」。これを小崎が採用していれば「キリスト教若衆会」というお江戸チックな名称になり、後世の我々は困ったと思います。

「すみません」文化との出会い

前置きばかりが長くなったようで、「すみません」ね。

この「すみません」が、今日わたしが皆さんと共有したいテーマです。高尚な同志社スピリット・ウィークに、べたべたの日常京都弁をもってきて、すみません。

最初キリスト教文化センターの李元重先生からこのお話をいただいたとき「わたしなんかが、ホンマに良いんですか」・・・そして立派な案内物が同センター事務室の上野山さんから送られてくるたび「わたしみたいな、ベタベタの現場張付き人間が、こんなエラそうなここに名前が載ってもうて、ホンマすみませんね」と、何度も思ったものです。

そもそも、わたしはリトリートセンター所長でもなく、事務局長。わたしの代から、所長は不在です。わたしが所長オファーを柄でもないとお断りしたからです。瞬間的な直感でお断りしたのですが、それが実は、京都 YMCA リトリートセンターとはどういうセンターか？ということにより深く考えるきっかけになります。1966 年の開設以来、いやそれ以前の荒れ地の開拓ワークからいうともう 60 年以上、多くの会員諸氏のボランティア・ワークといえは聞こえは良いが文字通りの意味での汗をかく働き、週末ごとの無償の肉体労働によって建ち上げられ、維持されてきた—それがリトリートセンターなのです。

現在でも 600 人を超えるボランティアの方々とともに、わたしの仕事はあります。そう気づいたときにこの仕事は部下を抱える所長仕事ではなく、多くのボランティアの方々と一緒に歩む仕事であり、その意味でまさしくボランティア団体の事務局長や、と気づかされました。肩書きは事務局長にしてください—後でそう上司に願い出ました。

そして「すみません!」という今日提示させていただいたこの言葉は、実は京都 YMCA のボランティアの現場で日常的に飛び交っている言葉なのです。その意味で、わたし自身のオリジナルでもありません。これにはおそらく京都人、とくにご商売をされている京都の「町衆的」気質も、関係しているように感ぜられています。

といいますのも約 20 年前、こういう経験をしました。たまたま京都・大阪・神戸の各 Y 職員が全国会議で顔を合わせ、休憩時間に雑談した時のこと（当時わたしは神戸 Y の職員でした）。そこで、京都 Y 職員がやたら「すみません」を連発するのです。だんだん、大阪 Y の職員はイラついてきました。ご推察の通り、大阪 Y はどちらかというと押しが強めで「すみません」的文化を有しません。それでそのやりとりは、おおよそ以下のようなものになりました。

京都 Y「すみません、すみません」

大阪 Y「すみませんすみませんで、言うな！」

京都 Y「あー、すみません」

大阪 Y「せやから、すみません、言うなて！」

京都 Y「いや、すみません」

神戸 Y「いやいや、まあまあ、まあ・・・」

このときの会議の記憶など完全に失われているのに、なぜこの雑談だけ後々こんなにも自分のなかに残ってきたのかというと、実は次のような事情があります。のちに自分は神学を学びたいと一念発起し 2008 年、京都へ戻って来ました。そして同志社で学び直しをしながら京都 Y に関わり始めたところ、京都 Y の人間関係のなかに身をおくことになり、あちこちでまた「すみません、すみません」を頻繁に聞くことになったのです。徐々に「すみません」はあの京都 Y 職員だけの語彙ではなかった、ということに気づき始めます。すなわち、京都 Y に集うボランティアの多くの方々が、今も日常的に使っている語彙であるわけですね。

わたしは幼少期から大学の学部生時代も京都にいましたが、当時この文化をあまり意識しませんでした。そして就職したわたしは、できるだけ人に謝るようなことがないように仕事をせなあかん、と思いつめていたように思います。つまりは、わたしが 20 数年勤めた神戸 Y にもこの「すみません」文化はほぼなかったのだと、今振り返ります。

ですが、今や見てください。「すみません」が言えない大人たちのために、日本国内でも世界中でも、えらいことになっていると思いませんか？「すみません」を絶対言わない究極が、戦争だと思いませんか。

そんな今、あらためてわたしは京都 Y の「すみません」文化こそ、あるいはより広く京都人の「すみません」精神こそ時代を救うものじゃないか、とまで思うわけです。

「すみません」から今日の聖書箇所へ

京都 Y における「すみません」という言葉には、実は大事な表明が 3 つあるように感じます。まず自分を無理に正当化することはしません、という表明。第 2 に、自分の正しさを相手

に吞ませるために力を用いませよ、という表明。そして最後に、相手（他者）との関係のなかで自分自身の組成を編みなおすことにオープンですよ、という表明。だから、ただ過去のことを謝っているという意味だけでとらえると、違うのですね。現在から未来へ、関係における自分自身の構え（の柔らかさ）を表明している面も大いにあるのです。

こう話してきて、今申しましたようなことは、実はこれ「悔い改め」というキリスト教の根幹の部分とも、近接する話なのではないでしょうか。

同志社人も Y 関係者も社会改良の精神といいますか、より良い社会をつくるということに熱心な人が多いです。戦前の同志社で法学を教え、全国 Y レベルでも指導的に活躍した中島重^{しげる}という人などがその代表ですが、より良い社会を神の国になぞらえて構想しました。わたしたちのより良い繋がりが神の国へと進展していく、というような。これなどはキリスト教の正統的教理からすると明白に間違いなのですが、いやでも良いではないですか。正しい教理のみにガチガチに縛られない自由な思想運動が、同志社（や Y）にはあったということなのですから。

ただし、気をつけないといけないのは、神の国＝より良い社会と言いつのるとき、人が前面に出すぎるがために、今日の箇所でいうと「悔い改め」がスポッと抜け落ちることがあるという点です。中島の論にある弱点がまさにそこで、他陣営の厳しい批判にさらされたことが知られています。

神の国と悔い改め

イエスは神の国と悔い改めとをセットにして語ります。

神の国をより良い社会ととらえ、人としてそれに努力することは大事です。ですがその目的に向かう際にとにかく良いことをする、正しいことをする、そこへ邁進するとき人はときにこれが正しいのだと自己を正当化し、正しさを認めろと力を振るい、他者との関係において自分の組成を編みなおすことを嫌うようになり、ついに異なる他者を排除するに到るという陥穽^{かんせい}にはまっていく—独善と排除の罠にからめとられがちなのです。

だからこそ人が神の国を思うときには常に、神の前で悔い改めることがセットで組み込まれていなければならない。ということではないのかと。

ところで悔い改め、悔い改め、と先ほどから言っていますが、これはキリスト教特有の用語ですので、分かりにくいかもしれません。実はイエスという人は、誰にでも分かりやすい言葉を工夫した人なので、それを少しひも解いてみても良いかなと思います。

イエスという人は、神殿の奥に隠された神には特権階級の人間しかアクセスできない、そういう建付けのあった古代イスラエルの時代、神を民衆のところまで連れてきたともいえる人です。イエスは神を「アバ」と呼びましたが、「アバ」とは「父ちゃん」というニュアンスです。後

代のキリスト教の人たちも、とかく話をムツカシクしたがるくらいがあります。「悔い改め」は、「『罪』の悔い改め」などという話です。ムツカシイでしょう？

イエスはどう言っていたか？神学的にムツカシイ「罪」を負い目とか負債と言っているのですね。貸し・借りの世界。人に借りがあれば返さない、誰かに負い目を感じたならその人と和解しなさい。わたしの解釈で言い換えるなら、「すみません」と言いませんか？そういう人と人との直の関係性の話が、神への悔い改めというテーマとイエスにおいてはダイレクトにつながっている。

とても人間味があふれている感じがします。

近くにいるイエス

イエス是一所懸命、民衆のところへ神を近づけようとした。ところがキリスト教は長い年月をかけ神もイエスも人から遠ざけ、高いところへ祭り上げてきたのでは？と、わたしは疑っています。そうしたほうが、遠い神とイエスに近づくことのできる人だけ力をもつことができますから。

わたしの現場はノンクリスチャンの人が大半です。仏教や神道、その他の新宗教の人、無宗教の人、ムスリムの人など、そういう多様なボランティアの方々といくつかの願いを共有しながら日々一緒にやっているわたしは、高く遠い存在にされたイエスを、より人間臭い存在感でもって人々に紹介したい、と願っています。キリスト教により神の右に祭り上げられたイエスよりも、生身の「ひと」として生きた、そういうイエスの言動そのものの方が、ボランティアの方々へダイレクトにより深いインスピレーションを与えてくれる、と実感するからです。ですから、できるだけキリスト教的な解釈・装飾をはぎ取り、イエスという「人」の語り口に耳を傾けたい、と願うわけです。

人間味あふれる感性で、お父ちゃんである神にイエスが悔い改めをいうとするなら、その言葉はこんな感じじゃなかったかな、と思います。

「すみません！お父ちゃん」

キリスト教の教理では、神に謝らない、謝ることのできないかたくなな人々―わたしも含め―のために、代わって謝ってくれたのがイエス、ということにもなっています。

Yの歴史に聞く

わたしは 20 代の頃は、大人になるというのは謝らないように生きること、というような、今思うと少々ゆがんだというか、かたくななところがあったと振り返ります。できるだけ謝らないと

いうか、人に負い目をもたずに生きられたら、それが成功することという思いもあったかもしれません。

皆さんはいかがでしょう？大人になり、子どもの頃より謝る回数はたしかに減ったとは思いませんか？それは大人になったということ？強くなった証明？ほんとうに？

一方で謝らない大人たちが、数々の問題を引き起こしているとも思いませんか？いったん力をもつと謝る必要がなくなると思う一部の人は、謝ってしまうと自分の人生に傷がつき、プライドに泥を塗られたと考える。だから謝りたくない。でもそういう生き方が、心豊かな生き方に本当につながるでしょうか。

同志社の、そして京都 Y の大先輩でもあった、末包^{すえかねとしお}敏夫という人がいました。この人物を中心に、わたしは原誠先生のご指導のもと博士論文を書いたのですが、戦前は先ほど述べた中島重らと「社会的基督教」の旗のもとで共闘した人でした。末包は 1916～21 年同志社で経済学を学び、卒業後神戸 Y、京都 Y で仕事をし、戦時下は南京と上海において日本 Y 同盟の「大陸事業」を展開しました。主な役割として日本の軍部と中国 Y の間に緩衝役として入り、中国側を大いに助け活躍したのですが、戦後間なしの 1946 年 12 月に「中国の友へ送るの書」と題する書簡様の一文をしたため、47 年 Y の機関紙『開拓者』に寄稿。GHQ による国際郵便解禁のタイミングに、中国 Y の友へあてて送ったと思われます。その文中で自分としては一所懸命に皆さんのために尽くしたと思い込んでいたが、そもそも立っていた前提が間違っていた、申し訳なかったと詫びているのです。これを初めて読んだとき、わたしの心は震えました。

戦後 1 年余で中国の方々に謝った日本人というのを、寡聞^{かぶん}にしてわたしは他に知りません。ご存知でしたら、教えてください。大事なことは、その後長く中国 Y の人々との友情が続いた、ということです。末包自身が、そのことをたいへんな人生の喜びと感じていたらしいということです。

「すみません」ということ自体が人生の汚点となり傷となる、と考える人もいますが、ここではむしろ「すみません」といい、自己正当化をはからず自身の組成を編みなおすことを厭わない態度は、むしろその後の関係性を喜びに変えていくという、そういうありようを目の当たりにしたようにわたしは感じたのでした。重要なことは表に現れた言葉だけではなく、言葉に象徴される態度や姿勢、加えて、そうしたものを受けとめ合うことを可能にする、それまでに双方が培ってきた関係性にもあったように思われました。

再びイエスに近づいて

イエスのいう悔い改めは、この「すみません」、そしてそれを受けとめる側との関係性に通じる人間臭いものだったのではないのでしょうか。人に「すみません」が言えない関係性しか作れないならば、神にも「すみません」とは言えないだろう。人のことは神のことだ。そこに隔てをお

かない(とわたしは解釈する)イエスは本日のテキストとはちがいますが、ルカによる福音書で「神の国はあなたがたの間にある」と語っています。そんなイエスの豊かなニュアンスは、先ほど申しました中島重という同志社の先達^{せんだつ}の自由な考え方も包み込みます。

現在から未来へ

今現在のわたしに話を戻せば、京都 Y でそしてリトリートセンターで、皆さんが互いに「すみません」と言い合い、それを互いに受けとめ合える関係性、そうした対等かつ動的な関係を、その輪の中に身を置きつつ、わたしもまたブーストしてゆく自分でありたいと願っています。どちらが偉い、どちらが強い、そういう価値観を壊す意味でも、ことはとても機能しているとも感じています。もちろん人間同士の関係であり組織ですので、力関係でことが進むことがまったくないとは申しません。ただし、京都 Y またリトリートセンターの「すみません」文化は、固定的な力関係を解体する言葉として、たいへん重要なものだと実感しているのです。

同志社スピリット・ウィークでこのことを話す機会の幸いに感謝しつつ、これが終わればわたしはまた「すみません」文化の輪のなかへ戻ってゆきます。そこで、対等かつ動的な関係性のなか、ボランタリーな集団のなかで自分の組成の編み直しを直接体験で学ぶ場というもの、これからも大事にしたいと願っています。Y にとっての過去となる末包の体験は、そんな Y の現在にも光を投げかけているととらえることもできます。

人と人とは互いに負い目を解消し合い借りを返し合うという、イエスが伝えた悔い改めに近接する(とわたしが解釈している)「すみません」文化について、さまざまに見つめてきました。皆さんのなかではどうでしょう?・・・あのことやこのことで、気まづくなったり、負い目を感じたり、意地を張り合ってしまったことってありませんか。あなたが気になっている人は、誰ですか?「すみません」を言い合える関係性を築けていますか?

イエスはいいます、負い目のある人といっしょに歩きなさい。恐れずに悔い改めなさい、つまり「すみません」からいきましょか。神の国なんて大きなことを夢想する前に、足元の直の関係をちゃんとせなあかんよと。そうしたら、高くて遠いどこかではなく、あなたたちの間に神の国はある・・・まあ、いきなりゴールはないかもしれませんが、神の国のひな型のようなものなら一瞬だけでも垣間見ることは、わたしたちにもできるかもしれません。

おわりに

今日もこのあと、わたしはいろんな宗教、いろんな属性の方々、ボランティアの方々と、「すみません」の世界で仕事をしてゆきます。「神の国」はクリスチャンだけの占有物ではないと信じながら、そしてイエスの生き方と言葉のなかには、Y に集う多様な人々と共有できる願いや学びや喜びがあると信じて、そこで生きようとしているのです。

ひとこと祈ります。

負い目や借りをすんませんと返し合い、そのことを受けとめ合う、動的で対等な関係を喜びつつ育むことができるように、弱いわたしたちを支えてください。イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン